

教職支援センター活動報告①

—教職を目指す学生により良い支援を行うために—

高垣 明夫
(教職支援センター特定教授)

はじめに

令和5年4月より、京都女子大学教職支援センターで勤務させていただくこととなった。教職を目指す学生の希望が叶うように、個人面接、場面指導、集団面接、集団討論、模擬授業、進路相談等の業務に真摯に取り組み、また、「教育実習論」や「教職実践演習」の授業を通して、子どもを真ん中に据えて教育現場で活躍できるように、学生を指導・支援してきた。

また、京都市立中学校の教育現場で培ってきた生徒理解、集団づくり、学級経営、授業づくり、教科指導、生徒指導、進路指導、人権教育、特別支援教育、地域との連携・保護者対応等について、教職を目指す学生に伝えると共に、学生の考えを聞き、双方向の対話を重ね学生の理解を深めていった。これらのことも含め、今年度教職支援センターで取り組んできた活動内容を振り返り、今後の改善の方向性を示したいと考える。

1. 今年度の活動を振り返って

教職支援センターの特定教授として、関わった職務内容を時系列で表したものが、右の表1である。以下に表中の1.(1)～(8)について簡単に説明する。

(1) 教育実習論(中・高)通年(6講座各8時間を担当、140名が受講)

教育実習は、学校現場で学生自らが子どもたちとふれ合い、向き合うことによって、教職の素晴らしさと難しさを感じ取ることができる貴重な機会である。そこで、実習が始まる前に意義、目的、心構え等を教えるため、4月当初から5週間にわたって講義を行った。教育実習について、見通しが持てず不安いっぱいの子に、実際の学校生活の1日の流れや教師の仕事内容、また、授業づくりのポイント等を伝えることで、少しずつ不安が取り除かれ、主体的に取り組もうとする意欲が感じられた。実習校の指導教諭との連絡調整を大切にし、事前に生徒理解につながる情報及び各教科の指導内容や指導方法等について、十分に確認しておくように助言した。

(2) 各自治体の教員採用選考試験説明会

4月当初から、近畿地方をはじめ中国、北陸、東海、関東地方等の各自治体の「教員採用選考試験説明会」を本学で実施している。教職を目指す学生が自治体研究を行い、第1志望を確定する上で、貴重な機会となっている。参加人数は自治体によって差があるが、京都市、京都府、大阪市、大阪府などは大きな会場が埋まるほどである。また、地方の自治体については、少人数ではあるが直接話を聞き、質問できる貴重な機会となっている。複数の自治体の説明を聞き、比較しながら自治体研究を行い、自らに最も適した自治体を選ぶように助言している。受験可能な複数の自治体を併願している学生も相当数いる。昼休みの時間帯(12:10～12:50)に実施していることもあり、学生としては参加しやすい状況である。

(3) 大学推薦を行っている自治体の推薦候補者の面接

「教員採用選考試験説明会」とほぼ同時期に、「大学推薦を行っている自治体の推薦候補者の面接」を実施している。面接の評価項目について、教職支援センターの定例会で検討を加え、若干の見直し案が示された。具体的には「『教職への志望理由』について、各自治体の教育施策(良さ)も記載する方がよいのではないか。」

表1 教職支援センターの主な活動内容

1.(1) 教育実習論(中・高)通年
1.(2) 各自治体の教員採用選考試験説明会
1.(3) 大学推薦を行っている自治体の推薦候補者の面接
1.(4) 教員採用選考試験対策としての学生指導(個人面接、場面指導、集団面接、集団討論、模擬授業、進路相談)
3. 教職応援セミナー、フォローアップ講座
1.(5) 教育実習巡回指導
1.(6) 教職実践演習(中・高)後期
1.(7) 教育実習論(中・高)通年の再開
1.(8) 2・3回生への進路相談
* 教職課程ハンドブックの補筆
※ 表中の番号は、本文中の記載番号を示している

また『学習指導要領を理解し、授業を展開するのに十分な専門的知識を有しているか』の評価項目については、今求められている授業づくりを意識して、『学習指導要領を理解し、主体的・対話的で深い学びを実践する意欲を有しているか』に変更してはどうか。」などの案が出ていた。

(4) 教員採用選考試験対策としての学生指導

4・5月は、「教育実習論」の授業及び「教員採用選考試験説明会」や「大学推薦を行っている自治体の推薦候補者の面接」の合間を縫って、「教員採用選考試験対策として個人面接指導」が入ってくる。今年度の5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行されたが、4月当初から対面で実施してきた。やはり学生の表情を見ながら対面で行う方が、オンライン面接に比べ、内容が濃いものとなっていると感じた。

6・7・8月になると教員採用選考試験が近づいていることもあり、「個人面接、場面指導、集団面接、集団討論、模擬授業」等の希望が多くなり、心苦しいことではあるがお断りしなければならない状況もあった。7月下旬から8月中旬にかけては、教員採用選考一次試験に合格した学生に対する「模擬授業や集団討論」等が、中心となった。模擬授業については、指導助言したことを踏まえ、お盆休みの間に学生同士で見せ合い、相互評価を行う中で、より良い模擬授業に仕上げていくように助言した。

(5) 教育実習巡回指導

8月下旬から9月中旬にかけての3週間、教育学専攻の学生が中学校・高等学校の国語科の免許（副免）を取得するために取り組んだ、京都市立中学校における教育実習に「巡回指導」させていただいた。京都市の中でも課題のある中学校であったが、休み時間や放課後など様々な場面で生徒とのふれあいを大切に、信頼関係をうまく構築していた。その甲斐あって、国語科の研究授業では、生徒たちが主体的にグループでの学習活動に取り組み、その結果を全体で共有し、学びを深めていた。今年度は機会をいただいたのが1人だけであったが、8月下旬以降であれば、もう少し対応させていただけると感じた。

(6) 教職実践演習（中・高）後期（オムニバスにて6講座各8時間を担当、157名受講）

9月に入り、後期の授業が再開される中、「教職実践演習」の授業が開始となる。学生自身が将来、教師になる上で、必要不可欠な知識・技能を習得できるように、教育現場で起こっている様々な課題を取り上げて授業を行った。それぞれの課題について、学生一人一人がまず自分で考え（個人思考）、それをグループで共有し一つの考えにまとめる（集団思考）ように取り組んでいる。付箋や模造紙を用いた集団思考の中で、新たな気づきや知識の再構築が起こっている。そして、グループでまとめた内容を全体で共有し（あるいは、ロールプレイし）、質疑応答を通して、深い学びへとつなげている。来春から教師として、より良くスタートを切ることができるように、また、教員免許を取得する上で、最後の科目であることを自覚して取り組めるように働きかけている。

(7) 教育実習論（中・高）通年の再開（6講座各8時間中の残り3時間、140名が受講）

11月からは、8時間中の残り3時間の「教育実習論」が再開する。教育実習において、すべての学生が教職の素晴らしさと難しさを感じ取ることができたことを踏まえ、教科指導と学級経営を中心に振り返りを行った。教科指導では、生徒が考える場面と教師が教える場面のバランスやグループ学習の際の指示の出し方・時間配分等が、課題として挙がっていた。また、学級経営では、休み時間や清掃時間また放課後の部活動の時間等に、生徒と双方向の会話を重ねることで信頼関係が高まり、より良く指導が入っていくことを経験していた。学級通信の課題では、生徒と共に活動した学校行事等を中心に、生徒の姿をよく捉えたものとなっていた。最後は、教育実習の理論を学び、実際に実習で身に付けた（インプットした）ことや課題だったことについて、グループ別にパワーポイントを作成して発表（アウトプット）し、来春に向けての意識を高めた。同時に、アウトプットする活動は、学びのより良い定着につながることを経験できたと感じた。教育現場で活かしてほしい。

(8) 2・3回生への進路相談

各自治体の教員採用選考二次（三次）試験が終了する9月頃から、2・3回生の「進路相談」が入ってくる。数的には少ないが、今後、教職を目指す上で「どのように学習していけばいいのか」、「そのために教職支援センターをどのように活用していけばいいのか」等を相談にやって来る。今年度から3回生受験が可能になった自治体が増えているため、早めに相談や面接を希望する学生に、従来よりも時期を早めて対応している。

2. 相談利用状況について

(1) 月別相談利用者数より

次の表2と図1は、令和5年4月から12月までに、私が担当した学生の相談利用数を月別で表したものである。そこから見えてくることを、以下に記述する。

表2 月別相談利用者数(実数と延べ数)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
実数	14	20	32	36	40	5	6	8	8	169
延べ数	21	35	61	59	56	6	9	9	9	265

令和5年4月に、教職支援センターに着任したので、相談業務については4月中旬から行った。それが相談利用者数に表れている。教員採用選考一次試験が近づいて来る6月から二次試験の直前の8月にかけて相談利用者数が急増していることが分かる。

4月当初から、教職カウンセラー3名、幼稚園・保育園担当の特定教授1名、小学校担当の特定教授1名、中学校・高等学校担当の特定教授1名の6名体制で相談業務に当たっていたが、6月に入りお断りしなければならない程、延べ数が増加した。毎週1回(月に4回)、個人面接や模擬授業を行った学生もあった。それと共に、6月から8月の教員採用選考一次試験の直前になって、慌てて個人面接や集団討論、また、模擬授業等に取り組み出した学生がいたことが、実数の増加から分かる。潜在的には、もっと利用したい学生がいたと推察している。

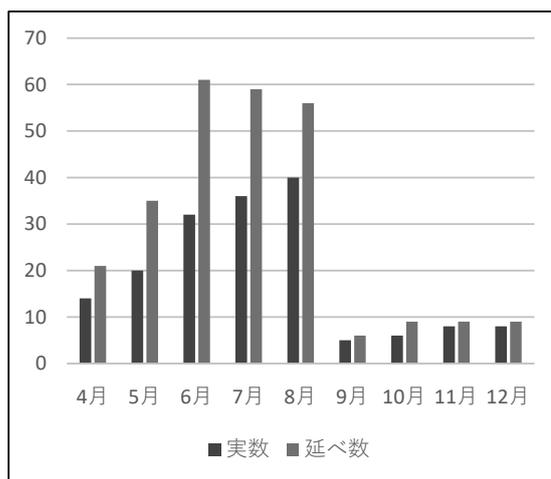


図1 月別相談利用者数(実数と延べ数)

(2) 学科・専攻別相談利用者数より

次の表3と図2は、上記の月別相談利用数を学科・専攻別で表したものである。そこから見えてくることを、以下に記述する。

表3 学科・専攻別相談利用数

	国文	英文	史学	食物栄養	生活造形	現代社会	法学	教育	音楽教育	養護福祉	合計
実数	7	3	5	9	3	4	1	38	6	14	90
延べ数	8	18	12	20	8	13	1	119	21	45	265

私は中学校・高等学校担当であるが、小学校教諭を志望する教育学専攻の学生や養護教諭を志望する養護・福祉教育学専攻の学生の実数・延べ数が多いことが分かる。これは、入学当初から明確な進路目標を持っている学生が多いことや、教職支援センターの利用方法をよく知っている学生が多いからだと考えられる。

一方、文学部(国文学科、英文学科、史学科)、家政学部、現代社会学部、法学部の学生の相談利用数が少ないことが分かる。教職課程は履修しているものの、教職を目指す確固たる意志を持った学生が限定的であることや、教職支援センターの利用方法をよく分かっていない学生が相当数いるからだを推察している。実際に、7月に入って急遽、教職支援センターを訪れてきた国文学科と現代社会学部の学生に利用方法を説明し、個人面接や模擬授業等を複数回行ったケースがあった。

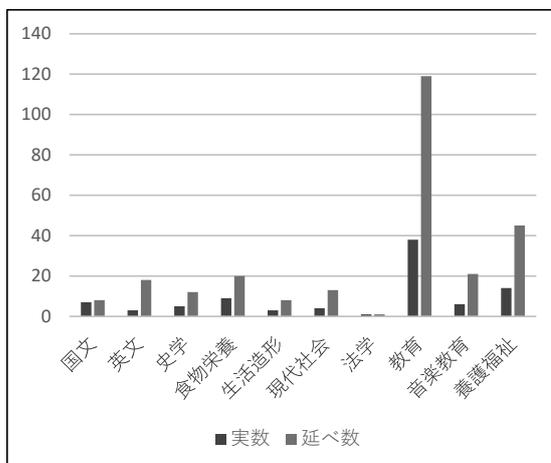


図2 学科・専攻別相談利用数

(3) 教職カウンセラーの相談利用数より

次の表4と図3は、令和5年4月から10月までの、教職カウンセラーの相談利用数を昨年度と比較して表したものである。そこから見えてくることを、以下に記述する。

教職カウンセラーの方々は、4月当初から8月下旬まで、5名の内3名が交代で毎日勤務される体制である。新着任の私が相談業務を4月中旬から行ったことや、集団面接や集団討論等を4月から計画的に教職カウンセラーに担っていただいたこともあり、4月の相談数が大きく増加している。

昨年度の6・7月に、教職カウンセラーに週に2回、集団討論を計画していただいたことが、学生のニーズに応えたものとなり、相談数が大きく伸びていた。今年度は特定教授も集団討論を担ったり、場面指導を求める学生のニーズもあり、特定教授に分散される形になったことが分かる。

また、今年度は教職カウンセラーが、8月1日からお盆休みに入られたこともあり、8月の相談数が大きく減少した。教員採用選考二次試験の直前でもあるので、教職カウンセラーの勤務が必要な時期であることを痛感した。

表4 教職カウンセラーの相談利用数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	計
令和4年度	132	170	303	270	135	26	21	1057
令和5年度	216	194	239	239	52	18	39	997

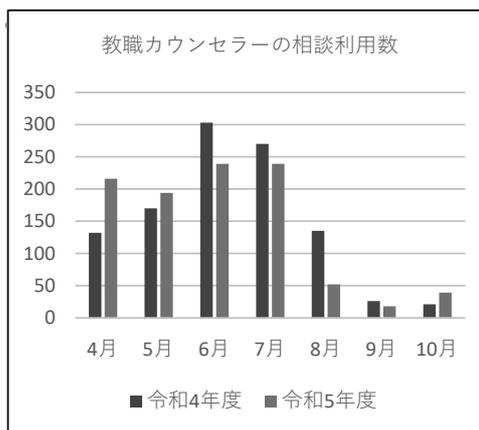


図3 教職カウンセラーの相談利用数

3. 教職応援セミナーの開催

教職を目指す2・3回生の学生たちに、できるだけ早く必要な情報を伝え、学びを支援するための一助として、一昨年度より表5の通り、「教職応援セミナー」を開催している。表6と図4は、「教職応援セミナー」の受講者数を表したものである。そこから見えてくることを、以下に記述する。

表5 「教職応援セミナー」の概要

回	対象	講座名	講座内容
1	2・3回生 6/29(木) 7/6(木)	「教員採用選考試験に向けて」 ～今から準備をしなければならないこと～	「教員採用選考試験に向けて」 ○見通しをもつためのスケジューリング ○エントリーシートの実際
2	2・3回生 7/13(木) 7/20(木)	「教育現場で学ぶこと学んだこと」 ～様々な経験を教職への道に～	「教員採用選考試験に向けて」 振り返りと、今しておきたいこと
3	3回生 7/27(木)	「2回生までの振り返りと今後の課題」 講師：教育学科 村井尚子教授	「教職課程ハンドブック」 ○振り返り・リフレクションシート
4	2・3回生 9/21(木) 9/28(木)	「自己分析・自己PRを考える」 ～自分のよさを伝えるために～	「教育現場での学びから」 ○自分を知らう (長所・短所、得意・不得意を分析)
5	2・3回生 10/12(木) 10/19(木)	「あなたが目指す教師像」 ～自治体研究も含む～	「子どもたちが、保護者が」 ○理想とする教師とは ○信頼する教師とは
6	2・3回生 11/9(木) 11/16(木)	「覚えておきたい基本マナー」 ～教員採用試験に向けて～	○身だしなみ・立ち振る舞い・ 言葉遣い等
7	2・3回生 12/7(木) 12/14(木)	「面接・集団討論・模擬授業等」 ～思いを伝える～	「個人面接・集団討論等」 ○各々のねらいを理解した思いの伝え方

今年度は、教員採用選考一次試験が3回生から受験可能となった自治体が増えてきたこともあり、2・3回生が合同で受講する形態に変更した。1・2回目は、参加数も多く、試験の早期化も含めて、関心の高さを示していた。

表6「教職応援セミナー」の受講者数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
2回生	61	46		20	12	7	6
3回生	95	62	33	61	41	42	42
合計	156	108	33	81	53	49	48

ところが個人面接に向けての実践的な内容である4回目以降について、特に2回生の参加が急に減少した。2回生にとっては、実践的な面接への対応は、まだ早いという感覚があるのかと推察している。

また、表5で示した通り、毎回木曜日に実施の「教職応援セミナー」終了後の、翌週月曜日と水曜日の3講時目(90分間)に、セミナーの内容をもとにした演習を行う「フォローアップ講座」を開催している。ただ、残念なことに、9月から12月までの参加者は多い時で5・6名、少ない時は1名という状況であった。しかし、1月に追加的に実施した時には、実践的な内容を行ったこともあり、12名から16名の参加となった。

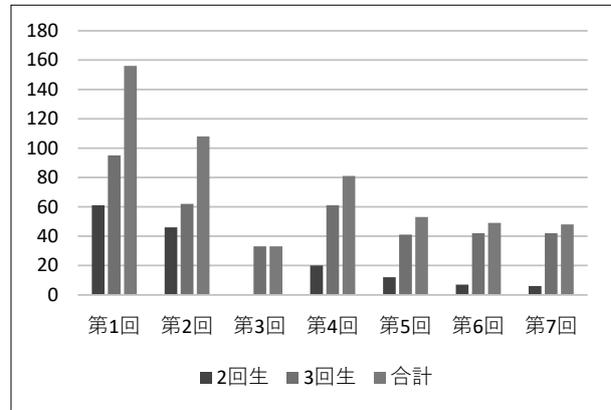


図4「教職応援セミナー」の受講者数

4. 成果と課題

成果としては、4月から教員採用選考試験対策の学生指導「個人面接、場面指導、集団面接、集団討論、模擬授業」等を行ってきたが、9月中・下旬頃から、合格した学生から連絡を受けることとなった。喜びに満ちた学生の表情を見ることができ、とても幸せな気持ちになった。中でも、石川県では中学校・高等学校の国語科1名、中学校・高等学校の家庭科2名、高等学校の情報科1名が合格となった。次年度以降も継続できるように期待したい。また、残念だった学生には、気持ちの切り替えと次年度に向けて講師登録について説明する等、サポートを行った。

また、個人面接や模擬授業等を行った後に記載する学生カルテについて、質問内容や実際の様子が分かるような記載に努めた。少し時間と労力がかかるが、学生指導を積み上げていく上で、大切なことであると考えている。

課題として、1つ目は、中学校・高等学校を志望する、文学部(国文学科、英文学科、史学科)、家政学部、現代社会学部、法学部の学生の相談利用数が少ないことである。教職支援センターの利用方法をよく分かっていない学生が相当数いることが分かったので、次年度は4月当初の「教育実習論(4回生)」の中で、広報していこうと考えている。また、LMSに教職支援センター関係のフォルダを設け、そこに必要なデータを入れて、学生がいつでも閲覧可能にすることで、埋もれている学生のニーズに応えることができるのではないかと考える。教職支援センターの定例会の中で、教務課の方から前向きに検討していると返答をいただいているので期待したい。

2つ目は、教員採用選考二次試験の直前である8月(お盆前まで)については、個人面接、場面指導、集団討論、模擬授業等の希望が多いため、次年度以降について教職カウンセラー3名に勤務していただくようお願いしたい。また、可能であれば、小学校担当の特定教授が3日間勤務であるので、期間限定でもよいので、週2日勤務の特定教授をもう一人配置していただくと、断る数が減ると考える。

3つ目は、面接の方法などについて丁寧に指導していただいている教職カウンセラーの個人面接と、教育現場での動向を踏まえて、面接の質問内容にも踏み込んで指導する特定教授の個人面接の両方を、満遍なく受けることが、学生にとって大切であることが分かった。次年度以降は、そのことを広報していく必要があると考えている。

4つ目は、「教職応援セミナー」後に実施している「フォローアップ講座」について、9月から12月までの参加者が極めて少なかったことである。しかし、1月に追加的に4回実施した「フォローアップ講座」では、特定教授が試験官役となり、実践的な集団面接や集団討論を実施したところ、各回とも参加者が12名から16名程度となり、よい意味の緊張感の漂う演習を行うことができた。このことから学生は、セミナーの学びを繰り返す座学的な演習ではなく、実際に役立つ実践的な演習を望んでいることが分かった。このことを踏まえ、

次年度からは9月から12月までの「フォローアップ講座」についても、座学的な演習を限定的に留め、実践的な内容を実施するように改善してはどうかと考えている。

今年度の教職支援センターの活動を振り返り、見えてきた成果と課題を示したこの活動報告が、次年度以降、教職を目指す学生に、より良い支援を行うための一助になれば幸甚である。